ぶらっとラボ

コロナ報道 時間増えると

感染防止のために手をアルコール消毒する人の割合が、新型コロナウイルスに関するテレビ報道の時間にともなって増えたり減ったりしていることを、大阪大などの研究チームが見つけた。人々の行動はコロナの流行状況そのものではなく、むしろ社会的な関心の高さに影響されていることを示す結果だという。

阪大病院（大阪府吹田市）に勤めていた森井大一医師は、病院に来た人のうちの何割が玄関ホールにあるアルコール消毒設備を使うのか、コロナ禍前の2019年12月に観察し始めた。日本医師会総合政策研究機構（東京都）に所属を移した21年4月以降も、週に1度ほど阪大病院に通って、観察を続けた。

阪大病院にあるアルコール消毒の設備＝大阪電気通信大の小森政嗣教授提供

利用者の割合は、当初は3・3%しかなかったが、新型コロナが広く報道され始めた20年1月にぐんぐん増え始め、同8月には7割前後に達した。その後は22年3月まで、65～75%程度の水準で推移した。

利用者の増減は、政府から日々公表される感染者数や死者数との統計的な関連性が、まったく見られなかった。たとえば利用者が急増していた20年前半の感染者数や死者の数は、その後とは比べものにならないほど少なかった。

消毒設備の利用者が増えたのには社会的・心理的な理由があると考えた森井さんらは、NHKのニュース番組がコロナ関連の報道をした時間を示すデータを入手。大阪電気通信大の小森政嗣教授（認知科学）が分析すると、報道時間の増減が利用者の増減と関連していた。

コロナ関連ニュースの影響だけをみたときには、報道が前日比で1時間増えると、その翌日に消毒設備を利用する人の割合が最大で約1%上乗せされるという関係があった。逆に1時間減ると、利用者の割合は1%減っていたという。

森井さんは「今回の発見は、社会におけるマスメディアの重要性を再認識させるものだ」と話している。論文は3月、専門誌に載った。（小宮山亮磨）